

草原の夢

小川未明

青空文庫

わたし
私たちは、村はずれの野原で、日の暮れるのも知らずに遊んでいました。草の上をころげまわったり、相撲を取ったり、また鬼ごっこなどをして遊んでいると、時間は、はやくたつてしまつたのです。

毎日学校から帰ると、家にじつとしていられませんでした。机に向かつて、遠くあちらの草原の方から、自分呼んでいる声かきこえるようです。そして、大急ぎで、復習をすまずと、駆け出してゆきました。

ある日のこと、正ちゃんや、善ちゃんは、もう先に野原へいって、なにかしながら、わいわいいっていました。

「なにをして遊んでいるのだろう？」と、私は、そのそばへ駆けてゆきました。

二人は、おんばこの花茎を取ってきて、それをからみ合わせて、相撲を取らしていたのです。太い茎が、あたりまえなら、細い茎より強くて、切り放してしまうのですけれど、見ていると、善ちゃんの持つた細いのが強くて、正ちゃんのつぎつぎに出す太い茎をぶつりぶつりと切つてしまいました。

「やあ、勝つた！ 勝つた！ どんな強いのも持つておいで！」と、善ちゃんは、いば

つていたのです。

「善ちゃんのは、強いなあ。だけど、こんど、僕、きつと負かしてみせるから。」
こういつて、正ちゃんは、おんぼこの花茎をさがしに立ち上がりました。

「よし、善ちゃん、こんど僕とやろうよ。」と、私は、いいました。

「ああ、どんな強いんでもいいから、持つてきたまえ。」

善ちゃんは、まだたくさんある、自分の手の中の花茎をながめています。そして、正ちゃんのすわつていたところには、みんな半分はんぶんに切れたおんぼこの茎くきがいたましく散らばつていました。

白い雲しろくもの多い日おほひです。日の光ひひかりは、きらきらと草くさの葉はの上うえにあたつていました。私たちは、おんぼこをさがして実みのなつている長い茎ながくきを抜ぬいて歩あるきました。

「こんな採とった。もういいだろう……。」

走はしつて、私は、善ちゃんのいるところへもどりました。正ちゃんも、幾本いくほんとなく握にぎつて、かたきうちをしようと、勇いさんで駆かけてきました。

「さあ、善ちゃん、僕ぼくとしよう。」といつて、私は、強つよそうなのをよつて、向むかいますと、善ちゃんの強い、正ちゃんのをみんな切きつた茎くきが、もろく破やぶれて、私わたしのに負まけてしまいま

した。

「あんまり戦たたかったから、弱よわったんだよ。」と、善ぜんちゃんは、惜おしそうに、半はん分ぶんになったた茎くきを拾ひろいました。それから、しばらく私わたしの天下てんかがつづきましたが、いつか、正しょうちゃんの太ふとい強つよいやつにかなわずに負まけてしまったのです。

「堅かたい土つちに生はえている、おんぼこの茎くきが強つよいんだよ。」と、正しょうちゃんは、大おおきな発はっ見けんをしたように叫さけびました。

「そうだよ。人間にんげんだつて同じおないじやないか……。」と、善ぜんちゃんは、いいました。

私わたしは、「はたして、そうだろうか？」と、疑うたがわざるを得えなかつたのです。なぜなら、孝こうちゃんの家うちは、お父とうさんがないのに、また姉ねえさんが病びよう氣きで、一いっ家かは不ふ自じ由ゆうをしつづけている。それなのに、孝こうちゃんだつて、けつして、強つよそうに、見みえなかつたからです。

「例れい外がいがあるさ。貧びん乏ぼう人のほうにんが、金かね持もちより、病びよう氣きでたくさん死しぬんだというよ。

「そうかい。かわいそうだな。」

みんなは、思おもい思おもいに、心こころの中なかでなにをか空くう想そうしたのであります。

このとき、行ぎ商しょうに歩あるく、三さんちゃんのおばさんが、町まちからの帰かえりとみえて、大おおきな荷に

を負つて、原を通りかかりましたが、三人が、おんばこで相撲を取っているのを見ると、
にっこり笑つて立ち止まりました。

このおばさんは、村での物知りでありました。よく、世間を歩くからでありましようが、
どうして、こんないろいろなことを知っているかと思われるほど、いろいろの話を知っ
ていました。なんの病氣には、なんの草の根を煎じて飲めばなおるとか、どういう顔つ
きの人は、どういう運命をもつて、生まれてきたとかいうようなことまで知つていまし
た。そうかと思うと、いま西京では、こういう着物の柄がはやるとか、東京の人
は、こういう品を好むとか、そういうような話も知つていました。

しばらく、だまつて、子供たちの遊ぶのを見ていましたが、おばさんは、また、おんば
こについて、不思議な話をしたのであります。

私は、そのときの話を覚えていきます……そして、いつになつてもおそろく、忘れること
はないでしょう。おばさんの話には、——おんばこは、不思議な草だ、およそ、この草の
花の茎は、一本が普通である。しかし、まれには、二本の股に分かれた茎があるというこ
とでした。そのおんばここそ、この世の中の神秘を解いてみせる力がありました。神さま
は、たまたまこうして、草木に、自分の力を示すというのです。

「金のわらじをはいて、さがしても、一二股のおんばこがあったら、取っておくものだ。この野原に、こんなにかくさんあるが、一二股のおんばこはないかね？」と、おぼさんは、いいました。

「おぼさん、いくらさがしたつてないだろう。」

「ないということもない。あるという話だから。」

「おぼさん、あつたら、なんにするの？」

「わたしは熱心に、おぼさんの話に耳をかたむけていました。」

「昔から、労症という病はあつたのだ。ぴんぴん働いていた人が、だんだん元気が衰

えていつて、青い顔つきになり、手足がやせて、目ばかり大きく見え、そして、どこが悪

いということもなく死んでしまう、いまは、結核なんていうが、昔は、魔がついて、人

間の生き血を吸うのだといったものだ。それを、一二股のおんばこを乾しておいて、燈

心のかわりに、真夜中、病人の眠っているまくらもとにもすと、そのへやの中に

同じ人間が、二人まくらを並べて、うりを二つに割ったように、かわらずに眠っている。

その中の一人が、ほんとうの人間で、一人が、魔物の化けたのだ。それはいくら親兄

弟でも、見分けがつかないという話だ……。」

おばさんの話は、奇怪であります。みんなは、聞いているうちに、気味が悪くなりました。野原の上には、日が当たっていたけれど。

「おばさん、ほんとうのこと……。」

「ああ、それで、魔物を殺してしまえば、本人の病気は助かるが、あやまって、本人を殺したら、とりかえしのつかぬことになってしまう。だれにも、その見分けがつかないから、どうすることもできない。」

「魔物だと思って、人間を殺してしまつたら、たいへんだからね。」と、正ちゃんは、感歎していました。

「それで、どうしたらいいの？」と、善ちゃんは、おばさんの意見を聞いたのでありました。

それは、おばさんにもわからなかつたようです。

「なにか、しるしをつけておいたらよさそうなものだが、それが魔物だから、なにをしたつて知っている……。こればかりは、どんな勇氣のある人だって、思いきつてやることはできないよ。まあ、魔物を見るだけでも、一―股のおんばこがあればできるから、見つかつたら、取つておきなさいね。」

「おほ大きな荷を負ったおばさんは、こういい残していつてしまいました。」

私たちは、もう、おんばこで相撲を取ることは、忘れてしまつて、おばさんのいったことが、ほんとうかと議論しました。

「二股のおんばこなんて、どこにもないものだから、そんな話を作つたんだね。」

「そうかもしれないよ。また、肺結核にかかれば、たいていなおらないから、そんな話を作つたのかもしれない。」

「きつとそうだよ。ありそうで、なかつたり、なおりそうで、なおらないようなものを昔の人は、たとえ話に作つたのかもしれない。」

三人は、思い、思いの意見をいいましたが、私は、またしても孝ちゃんの哀れな姿が目に見え、に浮かんだのでした。

「貧乏でも孝ちゃんは、強くないよ。そして、姉さんも、工場へいつていたのが、病氣になつて帰つてきたのだろう。孝ちゃんは、お母さんを助けて、納豆を売つたり、近所のお使いなどをしていたのに、このごろ、顔つきがわるい。姉さんの病氣がうつつたのだろうというぜ。もし、それが、ほんとうだったら、かわいそうじゃないか……。」

と、私は、いいました。

「ほんとうに、かわいそうだな。」と、正ちゃんも善ちゃんも、急に、しおれたのです。

「僕は、孝ちゃんの背中せなかに、ほくろのあるのを知しっているよ。いっしょに、川かわで泳およいだときに見みたんだもの……。」と、善ちゃんがいきました。

「僕も知しっている。」と、私も、孝ちゃんの背中せなかのほくろを思おもい出だしました。

「悪魔あくまに知しれるといけないから、だまっておいで……。」と、正ちゃんがいきました。

三人は、それで、おぼさんのいったことがほんとうであつてくれればいいという気きに、いつしかなつたのです。それなら、三人の力ちからで、悪魔あくまを殺ころして、哀あわれな孝ちゃんここうの一家いっかを救すくつてやりたいという気きになつたからでした。

「二人ふたりの孝ちゃんここうが、まくらを並ならべて眠ねむっているんだね。そうしたら、すぐに、二人とも着物きものを脱ぬがしてみるのだ。そして、ほくろのないのは、悪魔あくまだから、そいつを殺ころしてやるんだ。すると、孝ちゃんここうの病びょうき気きもなおれば、また、姉ねえさんの病びょうき気きもなおつてしまいうだろう。」

「悪魔あくまは、ほくろのあるのを知しっているだろうか？」

「知しっていたつていいよ。僕は、いつか孝ちゃんここうが転ころんで、どこかにちよつと傷きずあとのあるのを知しっているのだ。」と、善ちゃんぜんが、いきました。

「どこに？」と、正ちゃんが、たずねた。

「悪魔が聞いているといけないから、だまつていよう。」と、善ちゃんは、注意深くい
いませんでした。

「それにしたつて、二股のおんばこを、見つけなければだめだろう……。」「と、私がい
つたので、

「みんなで、どうしても、二股のおんばこを見つかけよう。」「と誓つて、三人は、熱心
に草原を、二股のおんばこを見つげに歩きまわつたのです。

「見つかれしよ、見つかれしよ、二股のおんばこ見つかれしよ。」「

白い雲は、無心に空を流れてゆきました。いろいろの虫が草原から飛び立ちました。

キチキチと翅を鳴らして、ばつたが飛ぶかと思うと、大きなかまきりが、頭をもたげまし
た。そのほか、美しいちようが花にとまつていたり、へびが光る体をあわてて、草深い
中に隠すのもありました。

三人は、この夏の真昼間、不思議な夢を見つづけて、日のうす暗くなるまで、野原の中
を駆けまわつていたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「教育研究」

1930（昭和5）年7月

※表題は底本では、「草原《くさはら》の夢《ゆめ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2020年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

草原の夢

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>